様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４６８３０１６

研究課題名（和文）ロンドンの文化政策・文化産業における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究

研究課題名（英文）Research on Producing, Circulating and Consuming the Celebrity of Architects in the Cultural Policy and Cultural Industries of London

研究代表者
南後　由和（NANGO, YOSHIKAZU）

明治大学・情報コミュニケーション学部・講師

研究者番号：１０５２９７１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：ロンドンを中心とするヨーロッパにおける建築の文化政策・文化産業の実態を、フィールドワークや聞き取り調査を通じて明らかにしたうえで、1980年代のサッチャー政権から2012年のロンドンオリンピックまでにおける建築家の有名性の生産・流通・消費のメカニズムを、都市論とメディア論を交差させながら分析した。また日本でも、美術館関係者に限らず、一般誌の編集者、デザイナー、テレビ・プロデューサー、広告業界などへの聞き取り調査を実施し、建築の文化産業に関する研究を多業種にわたって展開した。

研究成果の概要（英文）：My research has elucidated actual conditions of European cultural policy and cultural industries for architecture centered around London through the fieldwork and interview survey and, on that basis, analysed how the celebrity of architects has been produced, circulated and consumed from Thatcher Administration of the 1980s to London 2012 Olympics by crossing the theory of urbanism and the theory of media. My research has also developed the study on Japanese cultural industries for architecture across various categories by doing interview survey with not only art museum officials but also editors of general interest magazines, designers, TV producers and the advertising profession.

研究分野：社会学

キーワード：文化政策　文化産業　建築　建築家　ロンドン　オランダ　メディア　非専門家

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、これまで主に 1980 年代までの日本における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究に従事してきた。しかしながら、80 年代後半以降のグローバリゼーション下において、東京、ロンドン、ニューヨークをはじめとする世界都市では、有名建築家が設計する美術館、スポーツ施設、商業施設が、ローカルな次元では、地域活性の起爆剤として、グローバルな次元では、都市間競争における卓越化の対象として商品価値を帯びるようになった。

それゆえ、国際的に活躍する有名建築家の移動性が、行政、多国籍企業、マスメディアなどと結びつきながら空間化するようになった 80 年代後半以降は、国内のみならず、グローバルな空間編制のなかで、建築家の有名性をめぐる利害関係を具体的なフィールドに深く立脚して捉えていく必要性を強く認識するようになった。

その点、ロンドンは、国際的な有名建築家のコンペへの登用と竣工後の評価・分析をするメディアの制度化が徹底されているほか、一過性の経済活性としてのトップダウン型の「都市再開発」から、持続発展的でボトムアップ型の「都市再生」への移行、NPO などによる市民に開かれた文化産業の普及などの点において、建築の文化政策・文化産業がもっとも先進的な都市といえる。

それゆえ、実際にロンドンで建築の文化政策・文化産業に関するフィールドワークや、研究期間中に開催されるロンドンオリンピック 2012 の事例分析を通して、これまでの研究テーマとしてきた建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究の時代・エリアを大きく発展させるとともに、建築の文化政策・文化産業、建築ジャーナリズムの研究を軸とした「建築の社会学」の基盤づくりに取り組むことを研究課題に据えた。

２．研究の目的

(1) ロンドンの建築の文化政策と文化産業の仕組みを、政権ごとの都市政策の展開と関連づけて明らかにすること。研究対象とする時代区分は、1980 年代のサッチャー政権下の都市再開発から 2012 年のロンドンオリンピックまでとした。

(2) 具体的な事例分析として、ロンドンオリンピック 2012 をめぐる建築の文化政策・文化産業の動向を取り上げ、ロンドンオリンピックにおける建築家の有名性の社会的な生産・流通・消費のメカニズムを、文化産業の報告書、建築専門誌、一般紙誌の比較考察によって明らかにすること。

(3) ロンドンの建築の文化産業に関する研究機関以外に、北欧とオランダ建築博物館などを調査対象に加え、ヨーロッパの建築の文化政策、文化産業の動向の比較研究をすること。

３．研究の方法

(1) 1980 年代のサッチャー政権以降のロンドンの建築の文化政策の推移を、各機関の報告書の分析をもとに、都市政策と関係づけて明らかにしたうえで、ロンドンで活動する建築の文化産業の機関・団体を抽出する。そのうえで、行政、民間、非営利部門別の建築の文化産業を「供給者・専門家向け」、「享受者・市民向け」に区分し、ロンドンで活動する建築の文化産業の諸機関・団体の布置を明らかにする。

(2) 都市再生における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する事例分析として、開催期間中の一次資料へのアクセスの利点を活かし、2012 年のロンドン・オリンピック（招致活動を含む）を重点的に取り上げる。

(3) 建築の文化産業がどのような広がりを見せているかを明らかにするため、美術館・博物館関係者に限らず、一般誌の編集者、デザイナー、テレビ・プロデューサー、広告業界などへの聞き取り調査を実施し、建築の文化産業に関する研究を多業種にわたって展開する。

４．研究成果

(1) ①ロンドンにおける建築の文化政策に関する調査：80 年代のサッチャー政権下による都市再開発の規制緩和と国営企業の民営化、90 年代のメージャー政権下の官民トップダウンによる物的環境整備中心の拠点開発、2000 年代のブレア政権下の都市再生における、行政、民間、非営利部門のパートナーシップの推進の流れを整理し、80 年代以降の環境運輸地域省の都市政策、文化・メディア・スポーツ省、王立芸術委員会（RFAC）、大ロンドン評議会（GLC）の文化政策の変遷と、公的部門による文化産業分野への介入の実態に関する調査を進めた。

②ロンドンにおける建築の文化産業に関する調査：王立英国建築家協会（RIBA）で、建築家の社会的地位向上に関する啓蒙活動の内実を明らかにするために、第一に、図面・模型・写真のアーカイブ事業、外部美術館・博物館との連携プログラム、第二に、定期刊行物や報告書などの分析を行なった。また、デザイン審査の仕組みを整理するため、英国建築都市環境委員会（CABE）についての資料収集を行なった。

(2) ロンドンに限らず、同分野を牽引する研究機関のひとつであるオランダ建築博物館、RKD、ハーグ市立美術館を重点的な調査対象

に加えた。また、具体的な作家のコレクションの収集、保存、公開などに関する事例分析を掘り下げて研究するために、Fondation Constant の活動を調査対象に設定し、各美術館のコレクションの調査、財団関係者やアムステルダム国立美術館のキュレーターへのヒアリングを実施した。往復書簡、図面などの一次資料の収集や美術館の収蔵状況の把握などを通じて、建築の文化産業の実態を詳察することができた。

(3) ①ロンドンオリンピック 2012 における建築家の有名性の生産・流通・消費に関する研究：オリンピック開催期間中に競技施設および会場周辺のフィールドワークを行なったうえで、建築の文化産業のオリンピックに関する活動・刊行物の考察、建築専門誌と新聞のオリンピックに関する記事の収集を進めた。

②ロンドンオリンピック 2012 における建築と資本の結びつきに関する研究の一貫として、会場のストラットフォード地区のショッピング・モールに関する分析を試みたコラム「ロンドンオリンピック 2012 と SM」を執筆した。

(4) ①建築の非専門家が、専門家とは異なる建築の流通価値をどのように見出し、建築が種々の文化産業のなかで、どのように「メディア・コンテンツ」として扱われているかを明らかにするため、一般誌の編集者、デザイナー、テレビ・プロデューサー、広告のディレクターなどへインタビューした。それらの成果を、日本建築学会の会誌『建築雑誌』2015 年 7 月号の「特集 メディア・コンテンツ化する建築」で発表した。

②建築家×異分野の専門家×東京大学大学院情報学環教員の組み合わせで実施し、建築と演劇、音楽、映画、生物学、数学などの異分野との連続性と差異、専門性と学際性について議論した『建築の際――東京大学情報学環連続シンポジウムの記録』を、編者として刊行した。また、「建築の際」の続編として、大学および大学院で建築の教育を受けた後、アート、美術館学芸員、舞台演出、ファッションなどの異分野に進んだ人たちが、それぞれの分野で「建築的思考」をいかに応用しているのかに光を当てる連続シンポジウム企画「ken-tic 建築的思考から」を共同で立ち上げた。同企画のウェブサイトを開設して、各回のシンポジウムの記録を公開した。

(5) ①1964 年の東京オリンピックにおける国立競技場と代々木競技場を、新聞記事での表象のされ方という「メディアにおける建築」、歴史や集合的記憶が刻印された空間や都市のイメージを規定するランドマークという「メディアとしての建築」の観点からそれぞれ比較考察した論文「東京オリンピック 2020 に向けたスケッチ」を執筆した。同論文では、1964 年と 2020 年の東京オリンピックの建築・都市に関する前提条件の違いについても、ロンドンオリンピック 2012 の状況を踏まえながら考察した。

②アーカイブとしての都市の側面などに着目し、東京文化資源区構想と東京オリンピック 2020 に向けた展望について考察した論考「個都・東京――東京文化資源区構想と東京オリンピック 2020 をめぐって」を、『TOKYO1/4 と考える オリンピック文化プログラム――2016 から未来へ』に寄稿した。

(6) ロンドンの美術館 V&A での「ビジョンズ・オブ・ジャパン」展など、建築の展覧会のキュレーションやコンペティションの審査に従事してきた建築家の磯崎新の仕事を整理した『磯崎新建築論集第 7 巻 建築のキュレーション』の編集協力を担当し、解説を執筆した。これまでの磯崎に関する研究は、建築物および都市を対象としたものが多くを占めていたのに対して、本研究は、展覧会、国際会議、コンペティテョンの審査、公共事業のコミッテョナーなどを通じて、建築外の領域を巻き込みながら、建築の新たな文脈や枠組みを提示する「建築のキュレーション」に照準を定めた点に独自性がある。

(7) ①ロンドンとニューヨークを拠点に制作活動をしている美術家のス・ドホの展覧会「ス・ドホ｜パーフェクト・ホーム」展（金沢 21 世紀美術館）の展覧会図録に、家とアイデンティティ、場所と移動、絵画と彫刻とファッションと建築の境界などを考察した論考「境界を編みなおす家」を寄稿した。

②イギリスの現代美術家デミアン・ハーストの仕事を陳列・キュレーションの観点から考察した論文「陳列とキュレーション――ユニクロ、コムデギャルソン、デミアン・ハースト」を執筆した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 南後由和、1990-2000 年代における批評／建築／情報技術のトライアングル、IDEA、査読無、No.370、2015、pp71-76
② 室井淳司、聞き手 南後由和、星野雄、空間×体験×SNS のデザイン――キリン一番搾りガーデン、建築雑誌、査読無、2015 年 7 月号、2015、pp24-25
③ 井口毅、聞き手 星野雄、南後由和、建築を通して家族の再生を描く――「大改造!! 劇的ビフォーアフター」、建築雑誌、査読無、2015 年 7 月号、2015、pp22-23

④ 原研哉、聞き手 南後由和、藤原徹平、建築家との協働・境界線――「HOUSE VISION」から産業の未来を考える、建築雑誌、査読無、2015 年 7 月号、2015、pp14-17
⑤ 吉家千絵子、松原亨、聞き手 有岡三恵、寺田真理子、南後由和、建築の消費者代表であり続ける――『Casa BRUTUS』、建築雑誌、査読無、2015 年 7 月号、2015、pp8-11
⑥ 南後由和、山崎泰寛、主旨――特集 メディア・コンテンツ化する建築、建築雑誌、査読無、2015 年 7 月号、2015、p2
⑦ 南後由和、東京オリンピック 2020 に向けたスケッチ――都市とスポーツ、現代スポーツ評論、査読無、30 号、2014、pp98-109

〔学会発表〕（計 1 件）
① 司会 南後由和、原田謙、テーマ報告部会都市とアート、日本都市社会学会、2013 年 9 月 8 日、立教大学

〔図書〕（計 6 件）
① 南後由和、個都・東京――東京文化資源区構想と東京オリンピック 2020 をめぐって、勉誠出版、TOKYO1/4 と考える オリンピック文化プログラム――2016 から未来へ、2016、pp154-172
② 吉見俊哉監修、南後由和編、平凡社、建築の際――東京大学情報学環連続シンポジウムの記録、2015、327
③ 南後由和、NTT 出版、ロンドンオリンピック 2012 と SM、モール化する都市と社会――巨大商業施設論、2013、pp191-192
④ 南後由和、アダチプレス、陳列とキュレーション――ユニクロ、コムデギャルソン、デミアン・ハースト、vanitas、No.002、2013、pp68-85
⑤ 磯崎新、南後由和、岩波書店、解説、磯崎新建築論集第 7 巻 建築のキュレーション、2013、pp279-310
⑥ 南後由和、金沢 21 世紀美術館、境界を編みなおす家、金沢 21 世紀美術館編ス・ドホ｜パーフェクト・ホーム、2012、pp122-130; NANGO,Yoshikazu, 21st Century Museum of Contemporary Art,Home: Reweaving the Boundaries, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa ed., *Do Ho Suh: Perfect Home*, 2012, pp160-169

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.nango-lab.jp
http://ken-tic.net

雑誌鼎談・新聞記事
① 黒瀬陽平、齋藤精一、南後由和、『バンクシー・ダズ・ニューヨーク』から考えるこれからの都市と ART の行方、週刊金曜日、査読無、2016 年 3 月 25 日号、2016、pp27-29
② 南後由和、分人の様々な家、毎日新聞、査読無、2013 年 2 月 12 日夕刊、2013、6 面

講演会
① 田尾下哲、新居幸治、川添善行、南後由和、第 2 回身体・舞台へ、ken-tic 建築的思考から、2016 年 1 月 29 日、東京大学生産技術研究所
② 磯谷博史、服部浩之、川添善行、南後由和、第 1 回アート・キュレーションへ、ken-tic 建築的思考から、2015 年 9 月 25 日、東京大学生産技術研究所
③ 南後由和、石山友美、『だれも知らない建築のはなし』上映後トークイベント、2015 年 5 月 30 日、シアター・イメージフォーラム
④ レム・コールハース、南後由和、藤村龍至、太田佳代子、東京で BIG を語る、『S,M,L,XL+――現代都市をめぐるエッセイ』発刊記念トークセッション、2015 年 5 月 17 日、TSUTAYA TOKYO ROPPONGI
⑤ 南後由和、建築・建築家の社会学に向けて、DANWASHITSU、2014 年 12 月 8 日、滋賀県立大学
⑥ ホルガー・プロイス、來田享子、南後由和、国際スポーツイベントのレガシーを考える、JSC シンポジウム、2014 年 10 月 18 日、秋葉原 UDX

６．研究組織
(1)研究代表者
南後　由和（NANGO, Yoshikazu）
明治大学・情報コミュニケーション学部・講師
研究者番号：10529712

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：